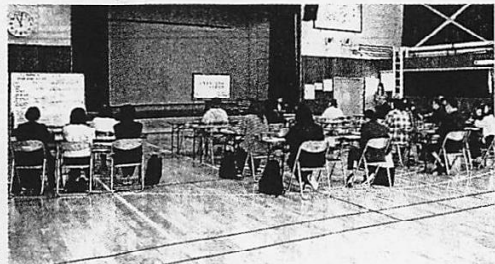


旭川聾 地域参観日・研修会

先進的な取組共有
自己表現力育む実践など

【旭川発】旭川聾学校(門真義弘校長)は6月23日、同校で「地域参観日・研修会」を開催した。写真1。公開授業や研修会を通じて、子どもたちの自己表現や合理的配慮を求める力を育んでいる指導の在り方や脳科学的なアプローチから実践している同校の早期教育について紹介。参加者は、特色ある先進的な取組から学ぶ教育への認識を深めた。



地域参観日・研修会は、約20年前から行っている恒例事業。より多くの人に、聴覚障がい教育や旭川聾での教育および支援活動への理解啓発を目的としている。

当日は、上川教育局の高田安利局長や佐藤麻友美社会教育指導班主査をはじめ、地域の小・中学校教諭や大学生、手話サークル関

係者ら計42人が参加した。全体会であいさつに立った門真校長は、同校が北海道の面積の約4分の1を校区とする「日本一広く、日本最北の聾学校」であることとを紹介した上で、「少人数だが、聴覚障がいの特性を踏まえ一人ひとりに合わせたきめ細かな指導を行っている。経験に裏付けられた言語力を身に付け、確かな学力向上、自立と社会参加

を目指している」と教育方針を語った。また、相談窓口となる乳幼児相談室やセンター機能のほか、昨年7月からスタートし現在54人が登録しているボランティア制度「旭川聾学校サポーターズ」を紹介。今回の参観日への参加によってサポーター講習が免除されることをアピールし「ぜひ本校の良き理解者、応援団になっていただきたい」と地域との一層の連携を呼びかけた。

続く授業公開では、幼稚園から中学部までの全学部の授業を公開。幼稚園では「話し合い」、小学部では国語、算数、自立活動、学級活動、中学部では合同自立活動を展開した。全学部の授業を通じて共通するポイントは、子どもたちが「言いたいこと」を不自由なく言語化できるようなサポートすることにある。これによって、自らの考えを相手にバリエーション、自己の権利や意志を表明する「セルフアドボカシー」の力を育むことを目指している。

特に「自立活動」の授業では、児童生徒が自分自身の特性を深く理解することに主眼が置かれた。自らの特徴や課題を整理した上で、周囲の人や社会に対して合理的配慮を主体的に求めることができるよう、段階的な自己理解を促す指導を展開した。

最後の研修会では、同校が有する寄宿舎教育や乳幼児相談室の果たす役割について説明した。0歳6ヵ月までに、様々な音や言葉のやりとりを通じて脳に刺激を与えることで、言語に関わるシナプスが活性化して脳内に定着する一方、無音などの刺激がない状態で不活性化したシナプスは不要な脳神経として刈り込みされるという脳科学的メカニズムを紹介。「より効果的な言語力の向上に向けて、早期からの適切な支援を行う乳幼児相談室の存在や、遠隔地の乳幼児期・学齢期の子どもたちを受け入れて集中的に言語獲得を支える寄宿舎の役割は大きい」と強調した。

「北海道通信 日刊教育版」(令和8年7月6日付 3面掲載)

北海道通信で本校の地域参観日を記事にしてくれました。

「先進的な取組」や「脳科学的なアプローチ」とは、ちょっと大げさかもしれませんが。しかし、0歳から通いはじめる乳幼児相談室のお子さんの脳の発達は0～3歳までに急激に発達することが知られています。ですから、脳への刺激としての音声言語や手話に限らず、認知発達に必要な適切な刺激や行動を肯定し、微笑ましく見守ったり、応援したりできれば、健全な子育てを楽しめることになり、子どもたちは健やかに成長してくれることでしょう。乳幼児相談室の保護者講座では、実際、そのような内容をお話ししましたと説明しました。

また、人間の脳は、経験や学習、環境の変化等に応じて脳の構造や働きが変化する性質をもっています。「可塑性」といいますが、「可塑」とは、粘土のように形を変えられるという意味です。つまり脳は固定された器官ではなく、生涯にわたって変化し続ける能力をもっているのです。一方で、臨界期という考え方もあります。あることを学習して学び、獲得する時期には特に適切な時期があるとう考え方ですが、教科学習の中でも確かにあるように感じますし、きこえると誰に教えられなくても誰もがことばを話せるようになる能力をもっていることから早期発見・早期療育(教育)を推奨しています。